



## ゴマシジミの保全のため、 生息環境の維持・改善を 進めています

ゴマシジミは、幼虫期にアリの幼虫を食べる特異なチョウです。成虫がワレモコウの花に産卵し、孵化した幼虫はしばらく花を食べますが、その後地面に降りてアリの巣へと運ばれます。本誌14号でも紹介しましたが、ゴマシジミの仲間はヨーロッパでも衰退が著しく、チョウの保全のシンボルにもなっています。

国内では北海道、本州、九州に分布しています。北海道にはまだ比較的普通にみられるものの、本州、九州では大きく減少しており、各地で絶滅が危惧される状況です。関東地方や中部地方でも、本誌20号の海野和男さんの記事でも触れられていたように、かつては生息地が点々とみられましたが、草原の衰退とともに大きく減少しており、現在では非常に限られた場所でしか見られなくなりました。

本協会では、山梨県の生息地で、2008年より保全の活動を進めています。この生息地は、圃場整備されていない棚田が広がる場所で、水田の畦およびその周辺の小規模な草地に生息しています。また、この場所は草地だけでなく、周囲の森林や湿地の自然度も高く、チョウの種数も多いほか、今では減少が進んでいる草本植物も豊富な場所で、生物多様性全体としてみても重要な場所となっています。

保全にあたり、土地の所有者の方にご賛同をいただき、主として生息状況のモニタリング調査や生息環境を維持するための草刈りを行ってきました。

しかし、ゴマシジミ特有の複雑な生態のため、保全を進める上でさまざまな困難があります。まず、寄主アリとの関係です。ゴマシジミはクシケアリ属の一種という特定のアリ



アリの巣で生活するゴマシジミの幼虫

のみを利用するため、産卵植物であるワレモコウの付近に、このアリの巣があることが必要となります。しかし、このアリはやや土壌が湿った場所を好んで生息しており、生息地の草原全体で見られるわけではありません。やや乾燥した場所には、体の大きさが近いトビロケアリが生息していますが、こちらはゴマシジミの寄主にはなりません。アリの生息環境にも、何らかの重要な条件があるようですので、まず草原内のアリの調査を十分に行い、アリの分布とワレモコウの開花場所が重なるように配慮しています。

ゴマシジミは、クロシジミやキマダラルリツバメなどの他のアリと密接に関係するシジミチョウと違い、ワレモコウがあれば、寄主アリの存在とは無関係に産卵することが既存の研究から明らかにされています。そのため、アリが付近にいない場合には、ワレモコウから地面に降りた幼虫はアリに運ばれずに死んでしまうのです。

次に、ワレモコウの開花と草刈りの時期とのバランスです。ゴマシジミがもっともよく産卵するのは、蕾から開花初期の花です。草刈りを、現地で従来行われてきた時期に合わせて実施していますが、刈る時期がずれると、ゴマシジミの発生時期と開花がずれてしまい、産卵できなくなります。そのため、刈る時期に失敗がないように試行錯誤し、好適な時期を確立してきました。

さらに、ワレモコウは土壌が湿った場所を好むため、乾燥化すると開花が悪くなります。最近、原因ははっきりしませんが、草地がやや乾燥している傾向があり、開花状況がやや悪くなっていると感じています。良好なワレモコウの株を確保するために、ワレモコウの補植も行っています。

さらに、2010年頃より生息地付近でシカの密度が高くなり、ワレモコウの花がシカにほとんど食べられてしまうということが起こり始めました。そのため、重要な地域にシカ侵入防止のネットを張り、シカの食害を防いでいます。

こうした活動を継続して行っていますが、年々生息状況が悪化しており、他のチョウと比較すると、保全は非常に困難な種であると感じています。何とか個体数が回復してくれることを願って、活動を続けています。

なお、この活動には、NPO法人えがおつなげて、北杜市オオムラサキセンターのほか、多くの会員の皆様にご参加・ご協力をいただいております。厚く御礼を申し上げます。今後もメーリングリスト等で、ご協力をお願いなどをお知らせしますので、ご協力をよろしくお願いいたします。



草刈り作業 (左:2015年6月 右:2013年4月)



シカ侵入防止ネットの設置 (2015年5月)



良好に開花したワレモコウ



昆虫ゼリーでアリを集め、寄主アリの詳細な分布状況を調査



ワレモコウの補植 (2014年6月)